

般舟三昧經におけるさとり周辺の周辺

本部 圓 静

本經に説きあかされる唯心思想が有空三門の中でも、有門に所属する所の縁起門および影像門の区分のうちの影像門に配当せしめられていることは、すでに考察せられている。つまり瑜伽行実践的な立場から三界唯心を説くものと見られているわけである。影像とは、もとよりあらゆる存在の無自性であることにたとえているのであつて、本質に対応するものと考えられる。

本經が影像門の唯心を説くことは、智度論に述べられる。つまり憶想することによつて不淨觀を達成することができるごときであると説いた後で次のように記している。

「菩薩摩訶薩は念仏三昧に入つて、悉く諸仏を見たてまつるも亦た復た是の如し。摂心を以ての故に。心清淨なるが故なり。譬えば人が其の身を莊嚴して淨水の鏡に照すに、悉く見ざるなく、此の鏡の中に亦た形相なく明淨を以ての故に、其の身像を見るが如し。諸法は本より以来、常に自ら清淨なり。菩薩は淨心を修するを以て、意に随つて悉く諸仏を見、其の疑う所を問う。仏、所問に答う。仏の所説を聞いて、心大に歡喜し、三昧より起ちて是の念を作して言う。『仏は何の所より来れるや、我身も亦た去らず』と。即時に便ち『諸仏は從來したまう所なく、我も亦た去る所なし』と知つて、復た是の念を作す。『三界の所有は皆心の所作なり。何を以ての故に、

心の念する所に随つて、悉く皆見ることを得ればなり。心を以て、心を見、心を以て、心を作る。心は即ち是れ心にして、心は即ち是れ我身なり。心は自ら知らず亦た自ら見ず。若し心相を取らば、悉く皆無智なり。心も亦た虚誑にして無明より出づ。是の心相に因つて、即ち諸法実相に入る。所謂常空なり」とこのように詳細に述べて心の影像としての作意の行境を全く本經に依拠している。

すでに少しくふれた行法の証果について經典はどのように体现せしめているであろうか。先の引用文は諸訳の行品に共通して説かれた記述であつたが、実践に関する十六の行相を列記した四事品に後続している譬喩品において三昧の受持が再説されている。

そこには戒の清淨であることを根底とした三昧の獲得が述べられている。ここに見られる比喩は、実に三千大千世界に遍満する宝によつて如来を供養するその功德よりも、三昧を聞信し受持する功德の方が、はるかに尊大であり殊勝であることを説いている。因みに藏訳は宝の部分七種類の宝というように、各の種類をあげているのではないけれども七の数字を出している。この品に見られる比喩は、宝のごとき三昧を聞いてよく受持し、思惟することがないのであるなら、あたかも無知なるものが、マニ宝珠を前にしてその真価を計することが不可能であるために、その形が小さいという理由によつて、わずかに一頭の牛と換えうる程度の判断力のなさに比定している。またあるいは、梅檀香を手にしてもその香りを聞くことを知らない愚癡者などにもたとえられる。

さてかくして、マニ珠に比せられるべき三昧が教説されて、諸訳のうち『拔陵經』のみは一応ここで終了している。

続く箇所は、隋訳では觀察品第六であり、三卷本は上巻を終つて

巻の中「無著品」第五と品を新しくしている。藏訳は第七章がそれに相当している。ここで述べられる行法の結果としてえられるさとりについて概観してみたい。つまり隋訳には「誰か能く諸仏菩提を成ずることを得るや。身の為^がに得るや。心の為^がに得るや。若し身が得れば、是の身は頑^{がん}駭^{がい}にして無覚無知なり。猶し草木石壁鏡像の如し。然れども彼の菩提は無色にして形なく像に非ず相に非ず。見知すべからず、触証すべからず。云何が更に以て頑^{がん}駭^{がい}にして、知なく、見なく識なし。分別する所なき無作之身なり。彼の菩提を得。菩提は是の如く既に形色なし。相に非ず像に非ず、見知すべからず、触証すべからず、誰か復た中に於て証^しを行する者ならん。若し心得ればこの心は色なく、見ることを得べからず。この心は無相にして得知すべからず。この心はかくの如く幻化に同じ。然るにかの菩提も亦しかり。色なく見るべからず。無相にして知るべからず。無漏無為にして亦幻化に同じ。云何が証すべや。云何が覚知するや。言く、身心により菩提を得る。」と見られ、さとの行境は幻化に等しきものと把えられ、執着をなくして極力、空ぜられるべきことが考察せられる。三巻本は要約的となつてゐる。

それには「持戒三昧を逮得することは是の如くなるべし。当に是の念を作すべし、我れ当に心に従ひ身に從つて得べし、復た更に念を作すべし、仏も亦心を用つて得ず、亦た身を用つて得ず、亦た心を用つて仏を得ず、亦た色を用つて仏を得ずと。何を以ての故に心といわば仏は心なし、色といわば、仏は色なし、是の心色を用つて阿耨多羅三藐三菩提を得ず」と述べており、ここにも身と心によつて念想して影現したところの仏を再び空じているのであつて、身心を伴つては真にさとりを得られるものではないことが説かれる。

藏訳はさらに具体的に記している。つまり「およそいかなるものが菩提を明らかにさとりうるのであろうか。身体によつて菩提が明らかにさとりえられるのか。あるいはそれとも心によつて、菩提が明らかにさとりえられるのであろうか。もし身によつて明らかに正覚がさとりえられるものなら、身は物の如く動くことはない。そうであるなら身は何もなさない。そしてまた憶想することもない。それはたとえば、草や樹や石壁や眼華の如きものである。菩提は色なく教示されるのでもなく現われるのでもなく、他をしてよく了知せるのでもない。また物として動きも存しない。菩提は行いなく、憶想なく、色なく、また教示されえない。また現することもない。他をしてよく了知せる明らかなきさとりはかくの如きものである。」と説き、さらに身と心によつて菩提を明らかにさとするのではないと主張している。たとえば心によつて菩提を明らかにさとするといつても心というものはないのであるからというわけである。ここで藏訳は隋訳と同様に如来の身心の無漏について言及している。

つまり如来身は完全であつてすべての理解を離れているのであるから、如来身についてはよく觀察し、修習するのであると説かれる。眞実の智慧の開顯によつて、この無漏性の把握が成り立つのである。

如来の想は絶対的な精神の集中力の外からは果されえないことが明白であり、まさしくここには心修習の実踐道が集約せられてゐる。